講　演

食と農の危機
──日本とアジアのムラは問う──

山　城　　滋

目　次

はじめに
1　日本のムラは今──空谷から
2　アジアのムラから
3　食と農の結い直し

はじめに

ただいまご紹介にあずかりました山城です。

まず、わたしどもの「中国新聞」について、若干説明をさせていただきます。中国新聞社は広島に本社がありまして、中国地方、主には広島、山口、島根県と岡山県西部をエリアにしている地方紙であります。エリアがひとつの県だけではないので、ブロック紙と呼ばれることもあります。中国新聞には、避けて通れないテーマが三つあります。ひとつは原爆です。これは被爆都市の新聞社として、ずっと追求してきています。もうひとつが瀬戸内海です。最後のひとつが中国山地です。

中国山地というのは、全国に先駆けて過疎化がすすんだところです。「38豪雪」という言葉を皆さんご存知でしょうか。昭和38年の豪雪で、中国山地の集落では２階まで雪が積もりました。それをきっかけに、「挙家離村」、家をあげて村を離れるといった現象が全国に先駆

けてすすんだ地域です。

そういう農山村から出た人たちが、瀬戸内海沿岸の工業地帯などに、働きに出ていった時代です。その急激に過疎がすすんでいる時代を丁寧にルポした「中国山地」という連載を、２年間続けました。

次に西暦でいいますと84年～85年に「新中国山地」というルポのシリーズを連載しました。これも中国地方の全域をまわるルポでした。

つぎに2002年の連載は「中国山地　未来へのシナリオ」というタイトルでした。今後、再生のためのシナリオをどう描いていけばよいのかを探る構成でした。

以上、過去３回の中国山地のシリーズを展開してきて、そうした仕事の延長線上で、私たちは「ムラは問う」という連載を始めました。そのときの問題意識としては、これほどグローバル化がすすんだ今、中国山地の克明なルポだけでは私たちが直面している現在の危機やその全体像が、もうつかめなくなっているのではないか。それならどういうやり方があるのか。危機の本質を描くためには、ものごとを複眼的に見る必要があると考えました。

中国地方の農山村、山襞に囲まれたなかに棚田と溜池があって、よく手入れされた山襞の端っこの方に民家が点在している。そこには日本の原風景といわれる、世代を超えて築かれた農の風景がありました。しかし全国に先駆けて耕作放棄がすすみ、里山的な光景がどんどん消えていっている。そういった村の衰退の背景には何があるのか、という問題意識です。

それは結局、私たちは今どういう食べ方をしているのか、というところに行き着きます。私たちの食です。昔は食の風景と農の風景がつながっていました。私たちがものを食べるときには、これはどこでどんな風に作られてきたのかなということを、ある程度想像しながら食べることができました。今は、スーパーやコンビニの陳列棚に並んでいる食品は多くの場合、どこで取れたものか、どこでどう加工されたものか判りません。すっかり食と農が切り離されています。これが食

料自給率４割というわれわれの現実の姿ではないでしょうか。食料の６割を海外に頼り、世界中から食べ物をかき集めるような私たちの暮らし方と、農山村の衰退は、裏表の関係にあると見ることができないだろうか。おおよそそういうスタンスから中国地方のムラをみて、さらにその足をアジアのムラへと伸ばしてみました。

「ムラは問う」は、一昨年の年初から７月まで連載いたしました。その後、一昨年の秋ぐちぐらいから食料がどんどん高騰していきまして、ご存知のように去年（2008年）の夏ぐらいまでかつてない食料高騰が続きました。

そして昨年の２月、中国産の冷凍ギョーザ中毒事件がおきて、海外から買う日本の食の安全が危ういものであることがクローズアップされました。我々がこの連載で問題にした食と農の矛盾が一挙にドラスチックなかたちで見え始めてきている時代だと思いました。

そういう変動・変革期のなかで、私たちはどう対応していけばよいのか、それに対するヒントになればと思って連載を続けたわけです。

１　日本のムラは今――空谷から

初めに、中国地方の村の今ということで、広島県の安芸太田町の空谷地区に入り込んで、10回にわたって連載いたしました。空谷地区というのは、文字通り空に向かっていくつもの谷が広がっている地域です。標高差200メートルぐらいの斜面に棚田があって、およそ五つの集落が張り付いているんです。1960年には64世帯324人いましたが、2007年には36世帯と半分強に減っております。現在は66人、平均年齢65歳で、高齢化率63％。高齢化が進み、棚田と赤瓦の里山空間が崩れつつある地域です。実は広島市内から高速道路を使えば１時間くらいで行けるんです。そういう意味では、そんなに遠くないんですが、いわゆるストロー現象ということで、都市が近くにあればあるほど吸い出され、人の流出がとまらなかった地域です。

この集落に入るに当たって、その地域の代表の方に対して、今の集落のありのままの姿を書かせていただきたい、その代わり、農山村のあり方についても都市部の人にきちんと考えていただくという記事にしたい、という話をしまして、受け入れていただきました。実はその前になんどか取材拒否にあっています。取材を受ける集落側は、あんたたちはどうせ限界集落じゃいうて書くんじゃろ、というふうな目で見るんです。

限界集落という言葉は、インパクトがあって非常にわかりやすいのですが、使われる側に立ってみると、なんか力が抜けていくような気がします。どうせ限界集落でなにやってもだめなんだ、と。住んでいる人に対する配慮だとかデリカシーに欠ける言葉だと思います。我々も連載では、どうしても使わなければならない場合だけ使うにとどめました。

① 継承の危機――「どうせワシらでおしまい」

空谷の連載ですが、私を含め4人の記者とカメラマン1人が二ヶ月間ぐらいかけて取材しまして、それぞれの家の歴史をはじめとして相当深いところまで知った上で書かせていただきました。ムラを支配している空気は、一言でいえば、どうせわしらでしまいよ、という印象でした。

まず、この記事（p. 5）をごらんください。これは雪が積もって銀世界の中をウォーキングしている70前の女性です。この方は雪景色の棚田が好きじゃ、と言われるんですね。なぜかというと、雪が耕作放棄地を隠してくれて、昔とあまり変わらぬ風景に見えるからなんです。それに対し雪がないときは、山が近うなったなあ、というのがこの人の感想です。

戦後、空谷の五つの集落からなる地域には棚田が約30ha ありました。今では2割の5 ha まで減っております。条件が不利な農地に、国も中山間地域等直接支払制度を作っておりまして、2000年から傾斜

（1）　17版　第40487号　（明治35年1月1日第三種郵便物認可）

ムラは問う ④

第1部　空谷から

将来描けず交付金断念

「助け合いを」継続へ模索も

広がる放棄地

年の瀬の寒波、広島県、安芸太田町空谷に、雪がしんしんと降り始める。夕刻、一面銀世界となった横山集落で、棚田を望む中の谷崎栄子さん（69）だ。「雪朝色の棚田が好き。この時だけは昔と変わらんけえ」。耕作放棄地の雑草を金鎌が隠してくれる。

朝夕の二十分ずつ。腕を大きく振り、歩を進める。体力づくりで三年前つくづく思う。

歩きながら、嫁入りした頃、夫の光春さん（76）は四十七年前の記憶を重ねる。「あっちが荒れ、こっちも荒れてきとうなった。」

東広島市でサラリーマン生活。農作業をプルには手伝えない。「頼るはわが身」。ウオーキングを始めた理由でもある。

住民アンケートの回答を集計した、横山の十二世帯で作付面積は一・五ヘクタール、耕作放棄地は四ヘクタール。

空谷全体でも作付け五・二ヘクタール、放棄地一・二ヘクタール。かつて約三十ヘクタあった棚田の作付面積は約一割に。今、子どもも世帯を含む自家消費米だけ作るケースがほとんどだ。

谷崎さんも二十ヘクタコシヒカリを作るが、六十ヘクタは放棄。

ムラが、農地を守ろうと決意を新たにした時期は、農業支払制度（中山間地域等直接支払制度）が始まった二〇〇〇年度。

耕作条件の不利な農地に交付金が出る中山間地域等直接支払制度を導入。第一期の五年間は、空谷の人から不満が出始めた。「草刈りの期限を決められると、サラリーマンは困る。金より休みを」。

二〇五年度からの二期目は、集落の将来像を柱に協定を更新しなかった。

リーダーが体を張って説得し、交付金を再締結したのが、千本集落。町の農業委員を務める由中穂さん（76）が、帰郷に、「未来を語れ」と迫る行政、横山だけは

「あと何年、田んぼを守れるか」。冒頭目差しながら雪景色の棚田を歩く谷崎さん（右奥・広島市提供）

半分を各世帯に配り、半分を草刈や水路の共同管理の日当に充てた。「最初の一、二年は順調だった。やがて、「草刈りの期限を決められると、サラリーマンは困る。金より休みを」。世話人もストレスをため込んでいった。

頼るはわが身

体張る世話人

住民アンケートから

中山間地域等直接支払制度について23世帯が回答し、19世帯が「役に立った」と評価した。農業に従事する21世帯のうち、現時点で後継者が「いる」の3は12世帯。内訳は、「空谷に居住」1「集落外から通い」が各6世帯と半々だった。

地で農業を続ける場合に、交付金を出す制度です。この制度に、このウォーキングしている人の地域も加入しまして、農家が協定を結んで、お互いに力をだしあって、農業を続けていこうとしたわけです。ここの横山集落では、交付金を半分は各世帯に配って、あとの半分を草刈や水路の管理などの共同作業にあてていました。これを続けてみ

ると、実際に戦力としていろいろな共同作業をやるのは地区外から帰ってくる若い人たちでした。おばあさんがそこに住んでいて息子世代は空谷を出たところ、広島市内などから帰ってきて作業するわけです。そういう人たちは、草刈の日時を決められたりすると、サラリーマンとして困るという不満が出てきまして、結局、世話人がいろいろつらい立場に追い込まれてストレスが溜まっていきます。この協定は５年に１回見直してつぎの２期目に移りますが、その２期目の2005年に、もう交付金は要らないということで、協定をやめてしまいました。世話人がもうこれ以上はできないということでした。

でも同じ空谷でも、その協定をなんとか続けようということで、持ちこたえた集落もあります。リーダーが、協定が崩れたらみんなが田んぼから離れてしまうから何とかしないと、と体を張って世話を一手に引き受けるというような形で続けておられるわけですが、そういうところも、つぎ、あるいはまたつぎの何年か後にどうなるかという保証までなかなかできないのが実情です。

広島県内のほかの地域を私が取材して回ったときに、82歳の方が協定の世話役を務めているというケースもありました。これはちょっとびっくりしましたが、自分以外に他にやる人間がおらんからしょうがないんですよ、というふうなことをおっしゃっていました。ですから、せっかく条件の不利な農地を守ろうという制度がありましても、その世話役が不在のために協定の打ち切りとなり、更なる耕作放棄につながる恐れがあるというのが現実です。先のウォーキングする女性ではありませんが、耕作放棄の広がりというのはできれば見たくない、気の滅入る光景ですよね。それが住民の心の中にもあきらめを広げていると思います。

棚田というのは元々どうやってできたということですが、記事（p. 7）の写真をご覧ください。石垣が幾重にもなってまさに砦のような感じです。ここの棚田は江戸後期くらいまでさかのぼることができ、その当時の文書も残っています。世代を超えて築かれた棚田です。20

年くらい前に大水害がありまして、この棚田の石垣がえぐられて断面が露出しました。断面をよく見ると、一番上に肥え土があり、その下に水漏れを防ぐ20センチくらいの赤土の層があって、その下に小石の層があって、一番下に大きな石の層があります。赤土はこの近くにないそうです。ですからそれを見た農家は、赤土は山の上の方から背負

（1）　17版　第40486号　（明治25年5月6日第三種郵便物認可）

ムラは問う ③

第1部 空谷から

棚田の価値

先人の労苦にじむ石垣

やねこい作業「継げ」言えず

冬枯れの棚田。春、水一三センチと手植えするしかない田も二枚ある。

をたたえると別人のような表情に。広島県安芸太田町の空谷は、写真愛好家が通うスポットである。

千本集落の名あいに張り付く計二十二枚、九枚の棚田。菊本大基さん（82）が、寄り添うように耕してきた。「辛苦してつくってる。それを、きれいな所じゃと人は言う」。菊本さんは苦笑する。

効率化の対極

下から見上げると、まるで石の壁。石垣の内側に、細長い田が連なる。手押しの耕運機、バインダーしかこない。幅二

農の営みは昔代、落ち下の田に照らし返す。こ農の営みは昔代、落ち下の田に照らし返す。こ

下の田に照らし返す。こ

下の田に照らし返す。こ

って運んできたものだろうと、先人の労苦を偲んで、胸が熱くなったと話していました。

こうした棚田は、カメラマンにしてみれば魅力的な被写体ですが、コメづくりは大変でして、効率化の対極にあるような農の姿がみてとれます。ひとつの例が、この石垣の草むしりです。なぜ草むしりをしなければならないのかといいますと、石垣の石の表面がきれいになると日光をよく田んぼに照りかえしますので、田んぼの上に立ち込めている「もや」が取れて、イモチ病が出にくくなるからだ、とうことでした。

さらに特徴的なことは、棚田は全て牛の基準でできているということです。田んぼと田んぼの間のあぜ道も牛の通れる幅ですし、石垣もちょっとへこんでいます。牛が通りやすいように。そういう牛が基準でできた棚田です。当時は牛がどの家族にも１頭はいたんですね。牛と農の暮らしというのがありましたが、それが消えて40年余り、先人から受けついだ棚田の営みが、村ぐるみ消えてしまうんではないかと皆さんは思っておられます。

ここで棚田を作っているのは80過ぎのご夫婦ですが、戦後まもなくの食料難というのをよく覚えておられる。それを潜り抜けてきただけに、いずれはこの狭い農地も役に立つことがあるのではないかと思ってはいても、子供には後を継げとは言えない。わしらでおしまいか、とおっしゃっておられました。こうした諦観、あきらめがどうしても漂ってくるという状況があります。

村のこれまでのことを継承していけなくなる危機は、あらゆる分野に及んでいます。

山の話をしますと、空谷は急峻な山に取り囲まれていますが、そこにはアオキと呼ぶ、常緑の杉や檜を植林した森がたくさんありますが、ほとんど手が入らないまま放置されています。空谷は今36世帯ですが、山に入っているのは２人だけ。後は放置され伸び放題。林業は農業よりも早く輸入が自由化されたため、どんどん値段がさがって、

現在でも補助金が出なければ間伐材を切り出しても赤字という状況が続いています。天然林はそのまま放置しておいても平気ですが、人がいったん手を加えた森林というのは、間伐除伐といった手入れをしないとだめになっていきます。例えて言えば、もやしが林立しているような林が中国山地にはずいぶん多いのです。間伐しないため、真っ暗になって下に日が差しません。そのため幹が太くならない。土壌も崩れたり、崩れやすくなったり、弊害が目立ってきています。そんな山を継承できなくなるという危機があります。

さらには食文化の面でも継承の危機というのがあります。この空谷でも、昭和一桁生まれ、あるいは戦前生まれの世代までは、自給的な暮らしをうまくやっておられます。味噌は手作りの手前味噌です。そういった世代の女性たちはふるさとの味を守ろうといって農産加工部を空谷全体で作り、こんにゃくを作ったり餅をついたりして、これを外部に売ったりしていました。この活動も20年続きましたが、皆さんが70代後半くらいになりまして、中止を余儀なくされています。

その子供の世代はほとんどが共働きですが、70代以上の親の世代の食文化が受け継がれていないのが現状です。そのため都会とあまり変わらない食生活になっているような状況もあります。

食文化というのは本来、農山村のいろんなものを都市部の人に示すときに、一番の売りになる分野です。直売所なんかでもいろんな加工品を出すことは重要ですが、それが引き継げなくなっている。今のうちに何とか手を打たなければいけない状況だと思います。たとえば山菜ひとつにしても、この空谷でも年配のご婦人は、いつどの時期にどこに行けばどんな種類の山菜があって、それをどのように調理すればおいしく食べられるかということを経験で知っています。そのようなものをどう引き継いでいくのか、というのが課題です。

② 集落維持の危機――農山村の５～10年後の姿

集落自体の維持も難しくなっています。記事（p. 11）に「同行の危

機」というタイトルをつけていますが、同行というのは本来、浄土真宗の念仏講の仲間のことを指す言葉ですが、ここでは集落の相互扶助の単位としてこの言葉を使っています。広島県の西部の安芸国、ここは江戸時代から浄土真宗が大変盛んでありまして、安芸門徒という呼び名もあるくらいです。余談ですが私どもの中国新聞には、全国でもあまり例のない宗教のページというのが毎週あります。「洗心」というページですが、それほどその安芸門徒というのは日々の暮らしに結びついているんです。

その浄土真宗の門徒の結びつきは、農村の暮らしや生業に非常に深く浸透していて、いろんなことがこの同行と呼ばれるこの集落の単位で行われてきたと言っても差し支えないと思います。そうした団結を強めるための仕組みのひとつとして、ここには田組と呼んでいるものがあります。場所によってはテマガエとかユイとかいうふうないい方もすると思いますけれども、田植えのときに自分の田んぼの６割から７割くらいを自力で植えて、後は残してみんなに植えてもらう。それをお互いの田んぼでやりあう。こういうやり方が昭和30年代まで続いていました。でも、そんな田組の習慣は急速に廃れていってしまい、この空谷自体も小規模化、そして高齢化が非常に進み、同行の支え合いも風前の灯という状況です。

葬式も農協の葬祭サービスにゆだねています。我々が取材に入った時点では親鸞聖人の命日の法要として報恩講というのがありまして、同行の最大の年中行事として各世帯が持ち回りで続けてきたんですが、これをもう休もうじゃないかという声が集落の中からでてきました。冬の寒い時期なので、ストーブをたかなければならないということもあるんでしょう。それで皆さん額をつき合わせて相談しましたが、やはりこれは同行の務めじゃないか、顔を合わせる機会をへらしちゃいけんと、反対意見が出ました。そして、暖房の負担のないもう少し早い時期に前倒ししようと、折り合う様子を「同行の危機」という記事で描いています。

（1）　17版　第40485号　（昭25年5月9日第三種郵便物認可）

ムラは問う②

第1部　空谷から

失われる集落の機能

「同行」の危機

葬式や常会を単独で開けず

故郷見直しを

報恩調だけに

広島県安芸太田町　横山　野影　香淵　名護木　千本　県道　林道小

「わしらは三、四年先がどうなるかもわからん」。頑固さでは集落一、二を争う菊本大基さん（81）の口調には憤りが混じっていた。月一回ある集落の常会で、取材班が依頼したアンケート。二十年後の集落はどうなっていますか。この質問が火種になった。この山里が集落の機能を失うのは遠くない。集った七人の誰もがそう思っているふうにみうけた。

広島県安芸太田町野影地区の千本集落。スギの巨木群に旅人が感嘆した。この山里が地名の由来という。機能も違なる南田の中に八戸が点在する。生活拠点を移した家を除けば実質六世帯。うち七十歳以上の夫婦や独り暮らしが四世帯を占める。

佐幸二口さん（81）は「夕飯を食べて、つる」の「囲炉裏」を静かに囲む。

昨春、夫良雄さんを亡くした。「同行」と呼ぶ相互扶助の単位で、女衆が煮炊き支えた葬式も、十数年前からほぼ業者任せに。同行は、常会も開けなくなった。「寺に読経があり、傍聞がありがたかった。ラックの荷台に乗せ、地の大会に参じ、傍聞をさらった。寺に読経があれば、あんどんの列が連なり、男たちはぶらぶらと気炎を上げた。

山や田に生活できなくなり、共同の暮らしは急変した。一年一回の割賦講が連と色あるる。農子、嫁には、太田川筋を下らせよかったのは田はやし八戸が点在する。生活拠点を移した家を除けば実質六世帯。うち七十歳以上の夫婦や独り暮らしが四世帯を占める。

「先がない」と嘆き返す。「きの町金と共金で一人前」。思うと口が滑らかになる。「田植」で田を住合しあう農の共同が団結を強固にした。

「昔、一年一回の割賦講が地名の由来という。一の年中行事だった。連と色あるる。農子、嫁には、太田川筋を下らせよかったのは田はやし八戸が点在する。生活拠点を移した家を除けば実質六世帯。うち七十歳以上の夫婦や独り暮らしが四世帯を占める。

「先がない」と嘆き返す。「きの町金と共金で一人前」。思うと口が滑らかになる。「田植」で田を住合しあう農の共同が団結を強固にした。

「夕飯を食べて、つる」の「囲炉裏」を静かに囲む。

故郷見直しを

集落再興講に翼を広げる。

時期やろ」と故郷が見直されると言う。千本菊本大基さん（81）。「ムラおこ」を唱えれば世紀。ムラおこしを叫ぶには不在の時間が長すぎたという。

師走、氷雨の中、開かれた割賦講に集まったのは十人。集子だけに恒例の時期に前倒すの自治がない。

「前へ」の時代は化したが、それでも負担は重い。

「冬はいけん。ふと気になる。田植えが近づきゃ意気も上がるじゃろう」。一九八八年の水害で自宅が流され、千本に残った亜生馬さん（76）が農用を見やる。

春の活気が待ち遠しい。あと一年、もう一年、せめきあいの暮らしを。（山本洋子）

月に1度開く千本集落の常会。住民が一堂に会する機会はめっきり減った（撮影・高橋洋史）

住民アンケートから

集落の戸数減少とその影響について空谷の36世帯に聞いた（複数回答）。減少理由は、「近くに動め先が少ない」（24世帯）、「現金収入の減少」（17世帯）など。影響は、「冠婚葬祭を手伝う人手が減った」（21世帯）、「集落のコミュニティー活動を続けることが困難」（20世帯）「水路や道路清掃など集落の共同作業が縮退」（17世帯）の順だった。

この記事の冒頭に、「わしらは三、四年先がどうなるかもわからん」。頑固さでは集落一、二を争う菊本大基（81）の口調には憤りが混じっていた――とありますね。

これは取材班が全世帯にアンケートで、20年後の集落はどうなっていますかということを聞いたことに対する住民の率直な反応です。実

はこうした反応に対し、取材をした若手記者は、考え込んで悩んでしまったんです。住民が三、四年先もわからんというような集落の実態を書いて、何が変わるのか、どんな意味があるのかと。確かによくわかります。しかしやはり我々は記者として書くのが、記録するのが仕事だろう。だからその住民のそういう手厳しい反応を含めて、あえて書くという方法しかないのでは、との話をして、その結果出てきたのがこの記事です。

取材班で長期連載をしていると、どこかで節目がありまして、この原稿に目を通したときに悩んだ末の、ある種の手ごたえというんですか、この連載はイケルのかなあということを感じました。

この記事のなかに毎月の寄り合いである常会、月に1回集まっていろんなこまごましたことも含めて伝達したり話し合ったりする場ですが、これが開けずに隣の集落に統合してもらったという話が出ています。まだ隣の集落に統合という形で手を差し伸べてもらえる所はいいんです。この空谷の中には常会が開けなくなっても、統合してもらえない集落があります。こちらの方がより深刻ですね。

この記事（p. 13）をご覧ください。お年寄りが手を引かれている写真があります。この写真の85歳のおばあさんが住む集落は6世帯ですが、うち2世帯は入院などで夜は不在で、残る4世帯のうち3世帯が高齢者のみです。空谷の中心部ですが、数年前から常会も開けなくなり、互助という支えも細ってきた。週四日ほどデイサービスのバスがこのおばあさんのところに行きますが、これだけが下界に開けた窓というのが実情です。デイサービスに通うだけではなくて、帰りにスーパーに連れて行ってもらったりして、それが生活の支えにもなっているということです。しかし、雪が降ったり、あるいは自分の体の具合が悪くなったらどうしようかという不安もある。携帯電話も通じません。そういうときに地域の老いをどう支えていけばいいのかということですが、これは非常に難問で、集落の統合というのがスムーズにできればいいのですが。先ほどの記事で雪の中を女性がウォーキングし

（1）　17版　第40492号　（明治25年5月6日第三種郵便物認可）

ムラは問う ⑨

第1部 空谷から

笑顔の常会徐々に消え

老いを支える デイサービス 外界への「扉」

世帯中お年寄りの独り暮らしは十世帯。高齢化率は50%に達する。「寂しいのはうちだけじゃないけえ」。気丈に振る舞うが、ふっと漏らした。

「寄が舞いだしたら怖つなるんよ」

昨年二月、空谷に七十歳の女性が心筋梗塞で亡くなった。夫の通報から駆け付けるまで、二時間以上かかった。住民アンケートの「必要なもの」との問いに、「携帯電話もつながらない山里。不安をなくせるだけでも」との切実な答えが返ってきた。

「高齢化が目立つ空谷に何が必要か」を問うアンケートは、「地域の助け合い」は各戸通知システム、「医療・福祉施設の充実」は各9世帯、「デイサービスなど福祉施設の充実」は各9世帯だった。

住民アンケートから

36世帯に聞いた「復帰回答」で、公共交通の充実が最多の17世帯、「地域の助け合い」は各9世帯、「デイサービスなど福祉施設の充実」が各9世帯だった。

病院の介護職員に手を引かれ、デイサービスに向かう土居さん（銀影・高橋洋史）

「七郷よいとこ　やさしの里よ　住んで住みよしの里よ　住んで住みよしの里よ」。集落の数から「七郷」とも呼ばれてきた広島県安芸太田町空谷。土居キヨメさん（85）は、昭和初期に作られた「七郷小唄」を披露してくれた。「祭りの歌」。空谷きっての歌い手だった。

黄金色に輝く稲穂、昼夜分かたず上る炭焼きの煙。「昔は」にはそんなに楽しいムラの記憶が込められる。「じゃが今は」とも。「住む」と土居さん。「住みよい」とも言えない。声はとたんに張りを失った。

夫を亡くした十五年前ではない。空谷の三十六世帯中、お年寄りが独り暮らしの世帯。高齢化率は50%に達する。「寂しいのはうちだけじゃないけえ」。気丈に振る舞うが、ふっと漏らした。

「寄が舞いだしたら怖つなるんよ」

昨年二月、空谷に七十歳の女性が心筋梗塞で亡くなった。夫の通報から駆け付けるまで、二時間以上かかった。住民アンケートの「必要なもの」との問いに、「携帯電話もつながらない山里。不安をなくせるだけでも」との切実な答えが返ってきた。

「高齢化が目立つ空谷に何が必要か」を問うアンケートは、「地域の助け合い」は各戸通知システム、「医療・福祉施設の充実」は各9世帯、「デイサービスなど福祉施設の充実」が各9世帯だった。

16世帯が独居

土居さんが特別なわけではない。空谷の三十六世帯が「公共交通の充実」を挙げた。

「寄が舞いだしたら怖つなるんよ」

昨年二月、空谷に七十歳の女性が心筋梗塞で亡くなった。夫の通報から駆け付けるまで、二時間以上かかった。住民アンケートの「必要なもの」との問いに、「携帯電話もつながらない山里。不安をなくせるだけでも」との切実な答えが返ってきた。

「高齢化が目立つ空谷に何が必要か」を問うアンケートは、「地域の助け合い」は各戸通知システム、「医療・福祉施設の充実」は各9世帯、「デイサービスなど福祉施設の充実」が各9世帯だった。

数年前に中止

だが、土居さんが暮らす七郷集落は、六世帯に減った。うち二世帯は高齢者の独居。五十、六十歳代がいるのは一世帯だけだ。互いを結ぶ輪ずれは、いや応なく細る。

集落は数年前、祭礼を中止した。二体の神輿が残るのみ。「体の神輿が残るのみ。「ここにおりたいんじゃが」。土居さんは寄る辺なさを募らせる。

「互助」すら難しくなった地域の老いを誰がどう支えるのか。集落の統合が支援の一つ。小雪の降る空谷で、答えは見つけられなかった。（宇久保聖司）

4面に写真特集

ている集落が統合先と想定されていますが、そちらの集落も自分たちだけで精一杯という状況でなかなか統合も難しい。ですから村から出ても近くに住んでいて通える人の力を借りるような手だてを考えたり、あるいは外部の業者の力も含めた支援ということも考えなければいけないのか。いずれにしても大きな問題です。

③　広がる格差

そういうふうな状況の背景として、小泉改革以降、農山村など地方でさまざまな形で寒風が吹き荒れてきているということがあります。

広島の中山間地域のようなところには専業の方は少ないわけですが、兼業先だった公共事業が細ってきました。そして農政自体が大規模経営に目をむけて、どちらかといえば競争力を強化しようという路線に舵をきってきますが、中国山地の零細農業に競争力を求められてもなかなか苦しいという実態があります。

同時にこの間、市町村合併が急速にすすみました。これは自治体リストラといってもいいかもしれません。自治体の財政が立ち行かなくなって合併するしかないという状況に追い込まれた末のことですが、記事（p. 15）では「統合の波」という題にしております。実は、先ほどの棚田のおじいさんと同じ集落で、40年ぶりに赤ちゃんが生まれて、産声があがった。それで住民がみんな喜んで子育てに協力するんですが、この子がうまく育つだろうかと不安になるという現実があります。

なぜかというと、この空谷がある安芸太田町というのは2004年に三町が合併してできた町です。空谷というのは旧町村で言いますと、旧加計町というところでした。空谷集落を降りたところに小学校があるんですが、この合併をきっかけに、この小学校の統廃合計画が持ちあがっています。この子のお姉さんは今この小学校の近くの保育所に通っています。この２人の子供は当然地元の小学校に通えるだろうと思っていたら、どうもそれは難しいということで、将来の不安が募っています。

合併で役場は支所となり、窓口業務中心となって、行政が住民から本当に遠くなっているという実態があります。この記事が出た当時、安芸太田町の町長は旧加計町長でしたが、その町長が言っていました。「自分が加計町長だったころは、空谷にも年に二、三回は足を運

（1）　17版　第40491号　（明治35年5月8日第三種郵便物認可）

ムラは問う ⑧

第一部　空谷から

役所・学校…次第に遠く

統合の波

「幼子の幸せ」確信と不安と

三年前、産声が初めて響いた。八世帯からなる広島県安芸太田町空谷の千本集落。若者が結婚し、子どもを授かる。そんな世代の誕生が途絶えて久しかっただけに、集落全体がわいたのだ。

だが、幼子が育つにつれ、周囲は疑問を抱く。先細る集落で、この子が幸せに育つのか―。

地域で子育て

午後五時。夕闇迫る谷あいの里に、上西俊之さん（71）の手をしっかり握る孫の虹夢ちゃん（3）の姿が見えた。中で五分ほどの修道保育所への送迎。「じっちゃ」の声に

「家族のおかげです」。けなげな一言に、かつて俊之さんの長男が、郵便局員の克美さん（43）と、妻の看護師の千代美さん（40）はじから感謝する。二人は早朝、広島市内へ勤めに出る。子どもは俊之さんと妻の千代子さん（69）の役目だ。

克美さんは、千一近い暮らしが好きだ。千本を離れまいと思ったことがない。「私も大雨がいい」と千代美さん。県北の農業高校に進んだが、虹夢ちゃんが通う定の修道小は、「一人込みの生活は性に合わない」と感じた。

戦後しばらくまで、区に「親子の契り」をかわし助け合う「ユイ」が残っていた。

「田舎でこそ」

統合の第一波は、空谷長雲化に向けた集配郵便局の再編で、昨秋から手がけられた。町は今年初め、職員の再配置を決定。約百三十人に担当地区を「これ」。急斜面での慣れた足取りで投場、郵便物を見極めることのない。

「周辺部の農業は、ますます厳しくなる。住民とひざを交えて、将来像を描く。これいなとこにおったらいけん」と父に言われます。克美さんは苦笑いする。両親の胸中もわかる。だが、「田舎にそいじゃないか。」初産には第二子も生まれる。「大きいはあちゃん」の豊かさもある。

住民アンケートから

「若い世代のUターンには何が必要ですか」と空谷の36世帯に聞いた。約3分の2の23世帯が「農業以外の雇用」と回答した。「自治体の定住対策の充実」が5世帯。「幼稚園などの教育施設」「農業復興による生活の安定」がそれぞれ3世帯だった。

校生以下の子どもがいるのは二世帯。上西さん宅は四世代六人が暮らす。

克美さんは、千本を十月の町村合併を機に、小学校を十校から二校、中学校を三校から二校に統廃合する構想が浮上した。空谷に近く、虹夢ちゃんが通う定の修道小は、廃校対象になりそうだ。

「人込みの生活は性に合わない」と感じた。

「ただいま」。虹夢ちゃんが保育所から帰ると、花が咲いたように家族の表情が和らぐ（撮影・宮嶋洋史）

（山本洋子）

びました。だが合併後は一度もいったことがありませんね」と。こういったことにも端的に表れているんだろうと思います。

この三町村というのはいずれも似たような小さな山間の町村ですから、この農山村をどう維持していくかという課題はまだ共通しています。もっと深刻なのは大きな都市と合併した小さな町です。その場合

は、市全体の課題の中で過疎や農村の課題というのはどうしても隅に追いやられますので、全体の議論の中で将来の農村をどうして行くかという展望を話し合うにも、そういう場すら減っているという問題があります。最近よく聞きますが、合併してよいことはひとつもなかった、もう一度合併を解消するようなことはできんじゃろうか、と。

昔は、取材で役場に訪ねていって職員に聞けば、大体のことはわかりました。あの集落にはこんな人がいて、こんなことをやっていて、あの人に聞けばだいたい歴史も深くわかるよというふうなことを役場で聞けましたが、今は元役場の支所にいっても窓口機能が中心ですから、全体がどうなっているか掌握できていません。昔の役場の果たしていた機能というのは、地域の情報センターだし、シンクタンクだし、住民の力を引き出し、裏から支えるようなことをしていた部分もあったように思います。それが市町村合併で極端に弱体化しているということです。

④　都市と結ぶ

そういう現状の中で、農山村をどうすればいいかというときに、やはり都市に目を向けざるを得ません。食べ物をずっと供給してきた都市とのつながりに頼るというのは自然の流れだろうと思います。

空谷も広島市内の中学生を米作り体験に招くという交流を７年間続けました。「空谷を考える会」という受け入れ組織も作りました。確かに中学生が、田植えや稲刈りで、村に入ってきてくれるだけでも活気が出ますが、農作業の準備や食べ物も用意してもてなさなければならない。みんなが高齢化してくるとそれが負担になってくるんですね、もてなし疲れといいましょうか。ですから、これからは村の負担にならないような都市との交流のあり方、逆に都市の方が助けてくれるような、たとえば草を刈ったりする支援型の交流ができないか、というのが課題です。ただそれをやろうとしても、その仕組みを作る力が今の村には残っていないという現実もあります。棚田オーナー制度

を始めようかなと出身者が考えましたが、しかし空谷に残っている両親が高齢で「もうそれはこらえておくれ。とてもそこまで体も動かんよ」という話をしておられました。どんな支援型の交流ができるのか考えさせられるような話です。

当面は空谷から広島市内に出ている方に期待せざるを得ません。そういう息子世代で、通いやあるいは二カ所居住の形で帰っている方もおられます。みんな元気出してやろうや、と呼びかけながら、川の草刈を買って出たり、あるいは耕作放棄された農地を重機で再生したりしているような、そういう定年退職の方もおられます。そういう人の力を借りながら、都市とのつながりを強めていくというのが、現実的な選択かなと、思いました。

幸い中国山地というのは村と都市まで車で一時間から一時間半、遠くても二時間ぐらいですから、行き来しやすいという利点があります。そんな条件を生かしていけばいいと思います。

空谷の連載は２年前の元日から10回連続で掲載しました。すると、切抜きを手にもって空谷を訪れる人が、土日には10組くらいあったそうです。こられた方がおっしゃるのは、空谷は自分たちの集落の5年後10年後の姿だと。村の衰退というのは中山間地域に共通した差し迫った悩みになっています。

⑤「むら残し」と「むらおさめ」

かつては「むらおこし」という言葉が盛んに言われたことがありました。1990年代ぐらいまででしょうか。今やその集落をどう維持、持続させていくかという、「むら残し」の時代に入っております。ただ、むら残しといっても、衰退する集落の中にはいくらがんばれといったって存続が難しい集落もあります。たとえば不便な山の中にあって、昔は山仕事とか鉱山とかがあったために人家ができ、その名残で今も何軒か家が残っているような集落です。そういう所で、住民すべてがお年寄りという場合には、もはやむら残しも難しい。そうなると「む

らおさめ」という発想も必要ではないかという意見も出ています。島根大学の作野広和先生がそんなことをおっしゃっています。私も取材を通して同感しております。

集落の戸数は徐々に減っていきます。4軒あったのが3軒になって、2軒になってやがて1軒になる。最後の1軒の場合は、ある日突然ではなくて、冬は息子の家に預かってもらい、夏には村に帰るという状態から、完全に引き払う状態へ、というふうになるかもしれません。

村がなくなる過程にはいろいろなタイプがありますが、それを行政として把握しているセクションはないですね。手を差し伸べるということもしていません。そうした「むらおさめ」の過程をもう少し意識的にケアする必要があるのではないかというのが作野先生の主張です。

たとえば住民が生き抜いてこられた証のようなものを何かにまとめるというようなことが必要ではないかということです。私が思いますに、記録だけではなくそれにプラスして、将来、日の目を見るかもしれない農地とか山とかを後の世代が活用できるようにしておくことも大切ではないかと思います。

つぎにとりあげる地域は島根県江津市の山間部にある集落です（p. 19)。ここは七軒のうち五軒が高齢者のみの世帯です。昭和30年代までは山仕事で食べていけました。燃料革命の前には、炭焼き、パルプ等いろいろあって、山で生計を立てていた集落でした。車道があるにはありますが、15分はたっぷりかかるような細い山道を行くようなところでして、高度成長期にはもう若者が出尽くしていました。それでも昭和一桁生まれの方を中心に、集落の農地を守ろうと、1982年に棚田を圃場整備し、2.7ha の農地にまとめるという一大事業をやりました。「一地区一農家」というのがその当時の合言葉で、県の集落作りの事例集にもこの集落のことが載っていました。実は私1980年代の後半にこの近くの支局にいまして、島根県内外のほかの2人の記者と一

（1）　17版　第40524号　（明治35年5月19日第三種郵便物認可）

ムラは問う ⑦

第2部　逆風の中で

「体動く限り集落守る」

覚悟の帰郷

生命線の道路 荒廃気がかり

木やコメに夢

のこぎり、スコップ、だ。「やれやれ。生きとるうちに、なんとか返済。壊に直面」。そう記したは、三点セットを車に積んでいる。道に倒れかかった木の枝を切り、岩を砕せた。崩れ落ちた岩を運び、崩れ土砂を取り除く。路肩の草を刈って牛の餌に持ち帰る。

江津市桜江町後山は、山道を車で上り詰めること十五分。山びだに点在する七戸に十一人が暮らす。うち五戸は高齢者のみの世帯。一部未舗装の道路は集落の生命線だ。「誰もおらようになったら、崩れても放っとかれりゃあせんが」。時折、本気に聞かれる。

後山集落センターに二月下旬、十人が集まった。囲炉裏の炭で煙霧状の荒廃通知が届いたから山から出た子どもたち に返済責任の承諾を得た。

その六年後、本紙島根版の連載で後山を取り上げた。「老いの波に抗しきれた地域も、もはや崩壊に直面」。そう記したのはつい。「もう年齢的に後ずさりのはつかり。遅かるず自然減か。安田さんはこうも綴った。「子どもたちは後山に帰りゃせんしい集めた六十ヒの山があり、木や木炭、コメにも夢が持てた。コンニやでやっちゃろう」。七〇年に博美さん(60)と結婚した。

時代は陸転。炭は売れず、コメ作りは赤字。「女房が一人で、ずっと小田の家と往み、そこから後山に通ってきたほしい。坂越さんはそう願う。道の行く末が気にかかる理由でもある。

「最後の一人」も覚悟。安田さんたちが後山にいたからこそ帰ってこれた。あれもほかのお陰。自分がおること。「農地の荒れ防止も役立っている。一日天、坂越さんは五十歩を退職し、動め始めた博美さんから世話を引き継いだ。

坂越さんは、開墾整備地の六十ヒ余を借り、コメや牧草を作っている。農業経子の寄り合いで、皆に頼まれた。「将来、荒らさん程度に維持ってもらえんかねえ」。体が動く限りは農地や山を守るつもりだ。

その先、もし後山から人影が消えたとき、農地や山を維持していく方策は。子どもが将来、せめて小田の家に住み、

「放して飼うのが夢じゃった」・自宅前の棚田跡で牛を放牧する坂越さん

牛繁殖に本腰

後山集落センターに二月下旬、十人が集まった。囲炉裏の炭で煙霧状の荒廃通知が届いたから山から出た子どもたち。近隣に出た出身者が坂を

一九八二年に完成。後山に再編した。鮮氏は、

一「大学をなかの出た者は

一農家の暮らし」。集落の生き残りを賭けた自前、上、下の調査を後山一点に集中。「農業は

一家と農業が増えた。数年後山に残らん」。父親の

一農地が、農地三百以上

一校にまとめた二・七ヒの

一農地が広がる。「一地区

一中に広がる。「一地区

一が一農家の暮らし」。集

一落の生き残りを賭けた自

一前、上、下の調査を後山

一囲炉裏の炭で煙霧状の

一荒廃通知が届いたから

一山から出た子どもたち

一近隣に出た出身者が坂を

一上つて手伝う。

一「もう年齢的に後ずさ

一りのはつかり。遅かるず自

一然減か。安田さんはこうも綴った。「子ども

一ある。十八年前の記事に

一年に博美さん(60)と結

一さらに下っていた。連載

一ある。「通り、後山に戻った。

一年前の「六年後、子どもの通

一学のため岡町小田に下

一りた。

一「大学をなかの出た者は

一農家の暮らし」。集

一落の生き残りを賭けた自

一前、上、下の調査を後山

一囲炉裏の炭で煙霧状の

一荒廃通知が届いたから

一山から出た子どもたち

一近隣に出た出身者が坂を

一上つて手伝う。

一「もう年齢的に後ずさ

一りのはつかり。遅かるず自

一然減か。安田さんはこうも綴った。「子ども

一ある。十八年前の記事に

一年に博美さん(60)と結

一さらに下っていた。連載

一ある。「通り、後山に戻った。

一年前の「六年後、子どもの通

一学のため岡町小田に下

一りた。

一「大学をなかの出た者は

一農家の暮らし」。集

一落の生き残りを賭けた自

一前、上、下の調査を後山

一囲炉裏の炭で煙霧状の

一荒廃通知が届いたから

一山から出た子どもたち

一近隣に出た出身者が坂を

緒に、農業問題を１年間連載したことがあります。その折に後山集落を取り上げました。

その当時、後山集落には18軒ありました。住民にアンケートをやろうと３人で下調べのために集落に入り込みました。大体調べ終えて、３人が町場の喫茶店で落ち合って議論しました。でも、この集落を取

り上げても未来がまったく見えない、取り上げることに何の意味があるのかという話になりました。先ほどの「同行の危機」を取材した若い記者の悩みと一緒です。迷いましたが、結局は集落に通いながら、７回続きの連載にまとめました。そのときすでに集落の中心にあった寺には住職がおられず、崩れかかっていました。そばに住んでいる方が、夜、寺が崩れる音が集落が崩れる音に聞こえる、と言われていたのが印象に残っています。老いの坂を越えてきた地域ももはや崩壊に直面という状況をルポしましたが、その次の年にNHKが春から秋までこの後山に通ってドキュメンタリーを作りました。毎年通われてこの集落を見取りたいという研究者もおいでになります。

この後山集落をほぼ20年ぶりに訪れて書いたのがこの記事です。寺はすでに崩れおちて空き地になっていました。20年前当時の家の半数以上は空き家になっていました。前の連載のときには、子供の教育のために下の町場に出ていて、子供がひとり立ちすればわしは後山に戻るとおっしゃっていた坂越さんという方が奥さんと一緒に集落に戻ってきています。牛を飼って放牧するのが夢だったそうで、奥さんも牛飼いがずいぶん好きになって人工授精士の資格もとって、夫婦で飼っています。この方は、車の中にのこぎりとスコップと鎌の三点セットを積んでいます。町場から曲がりくねった細い山道を運転しながら、倒れかかった枝を切ったり落石をよけたり、あるいは道端の雑草を刈り取って、牛に食べさせるというふうなことでして、この人いわく、この道路こそがこの集落の生命線です。いつも道のことが気になっている。将来この集落から人が消えたときに、がけ崩れなど災害で不通になった後、ちゃんと復旧工事がしてもらえるのだろうかということを一番気にしています。

坂越さんは集落のみんなでせっかく圃場整備したのだから、我々がもう動けんようになったり、おらんようになっても、農地は荒らさんように面倒見てくれんかといわれてるんですが、もう60代半ばを超えています。自身の将来にも不安があります。子供が戻ってくることは

もうないだろうが、自分がそうしたように、下の町場から車で上がってきて、通いでもいいから、農地や山の面倒を見てくれんだろうか、というのが願いです。

実際に無住になった廃村や集落でも、道があれば、結構そこに通う人がいる場合が中国山地にはあります。村の出身者、あるいはその子孫が、時々帰ってもう一回畑を耕したりしているわけです。坂越さんも実は自分の持ち山が60ha あって、みんなで圃場整備した農地もある。食料難または資源難の時代がいずれ来るかもしれない。そういう時には生かせる資源だという思いがご本人にもあるようです。ですから、今ある道路は住民の生命線、ライフラインです。そしてたとえ人が住まなくなっても、最低限のメンテナンスをしておけば、将来、食料や資源を生かすストックラインとして生かせるのではないでしょうか。先々をにらめばそんな発想が求められているのではないかと思います。

2　アジアのムラから

①「食のコンビニ化」の裏側

以上が国内編でありまして、これからアジアの村編に移りたいと思います。いままで申し上げてきましたように、先細る農山村という現状の裏には、カロリーベースで食料の 6 割を外国に頼るようになった日本の食の現実があります。

最近の日本の食の変化ということでいえば、主食の米の消費が減ったこともありますが、一番目立つのは調理済み食品に頼るような食のコンビニ化が急速にすすんだことでしょう。そういう食品は誰によってどんなふうに作られているのか、そしてそこでどんなことが起きているのか。そういうことを知らなければいけないのではないかと考えました。記者を中国とタイと韓国に派遣して現地取材を行いました。私は本社に留まって取材記者とやり取りしながらアジア編として20本

ほど連載しました。取材時期は中国産の冷凍ギョーザ中毒事件のちょうど１年前です。

中国やタイには冷凍の調理済み食品の加工所が集まっていますが、これは日本の商社などが資本面、原料調達、商品開発すべてに関わって日本人好みの商品を安価に生産する開発輸入と呼ばれる方式です。記事（p. 23）をご覧ください。「コンビニ化の裏側」と銘打っていますが、写真では白身魚のフライを次々に女性たちがころもをつけていくところを紹介しています。

ひと手間を省くために人海戦術で膨大な手作業が導入されて、冷凍の調理済み食品がつくられます。この記事の中で、中国の食品工場の総経理（社長）が「日本人の要求に応えていたら、メニューが六百種類を超えました」というほど、非常に多様なものをつくっています。中国では現地の人が食べない（東北部では食べるらしいですが）レンコンの栽培地が、一等地を占めているという現状があります。ゴボウも中国人は自分たちでは食べないけれど、日本人が食べるからといって栽培しています。レンコンは収穫が重労働で、高齢化した農家から敬遠されていますが、それを中国人が穴埋めしているという構図です。

食品加工会社は、日本との取引で、常に低価格を求められていることへの不満を抱いています。上海近くの食品会社の総経理は、「日本の消費者が食に払う金が少なすぎる、安さには必ず理由があるんだ。十円の差で何が切り捨てられるのか、どんなところにしわ寄せがいくのか、そのあたりを考えてほしい」と訴えています。現地では日本向けの食品工場という働き口ができてありがたいという反応は確かにあります。ただ、一方では、冷凍ギョーザ中毒事件の犯行の背景に、現地の工場内での待遇を巡り従業員の不満がたまっていたということがあげられています。どんどん安く買い叩いていくということの影響もあるかもしれません。我々は単に中国製品を安全安心だけの問題だけではなく、安さの裏には何があるのかということを知ることも大切で

（1）　17版　第40600号　（明治25年5月4日第三種郵便物認可）

ムラは問う ⑦

第6部　食　アジア発

「人海戦術」で食品加工

コンビニ化の裏側

特価品扱いで利益上がらず

ロールキャベツに密柑、ギョーザ…。日中英のニカ国語で書かれた製品パンフレットに、見慣れたおかずが並ぶ。外食産業と名付けられた山東省安丘市の拠点にある。門には、蜜月ぶりを誇るように中国と日本の国旗が並んで掲れる。

メニュー600種

「日本人の要求に応えていたら、メニューが六百種類を超えました」と総経理（社長）の劉海義さん。

人口約十三億人の約七割が農民とされ、日本の人口に匹敵する数を過剰な労働力と試算する中国。「日本人のひと手間」を省くため、膨大な手作業が投入される。

四百人がスプーンを片手に、黙々と具材を千切り、包む。三秒で一個のペースに立たされている。

「安さ第一の日本との取引は非常に厳しい。日本のスーパーではまたに特価品扱いですしね」

寒波さん45は、恐しげな表情を浮かべた。日本の大手食品メーカーが五割強を出資する青島冨士食品（国冨士）の総経理である。

たとえば日本向け冷凍ホウレンソウ。九六年は一㌔・一・五㌦だったが、昨年は・・㌦ごの間、微々の中で、単価を数円削るために、原料の質を下げたり、劣悪な労働環境を放置したりするケースも目立つ。

「加工業者は、十年余り、手間を省いて手ごわ以上がつぶれました」と寒さん。価格競争の中で、単価を数円削るために、原料の質を下げたり、劣悪な労働環境を放置したりするケースも目立つ。

「日本の消費者、食品産業で消費力を増す国」

冷凍食品の輸入　日本冷凍食品協会（東京）の会員アンケートの調査によると、冷凍食品の輸入の質は三万五千八百六十六トンと前年比31・4%増し、一九九七年前後（八万五二〇五トン）と比べると4倍近く伸びた。輸入元は中国（64%）、タイ（28%）が大半を占める。同協会の会員名簿には、中国（12社）タイ（7社）などアジアの食品企業もを連ねている。

クリック

手作業で次々と袋付けされる白身魚のフライ。飲食店や給食向け冷凍業務用が伸びている（山東省国冨士）

はないか。それを今回の中毒事件は教えていると思います。

話はタイに飛びますが、加ト吉の冷凍麺というのはシコシコして歯ごたえがあって、私も好きでした。でもなぜシコシコしているかはよく知りませんでした。調べると、冷凍うどんのパッケージの裏側に小さく「小麦、でんぷん」と書かれているんですね。このでんぷんで

す。普通のでんぷんではなくて、タイのキャッサバというイモ類から取れたでんぷんで、非常に粘り気があります。これを使っているからシコシコした冷凍麺ができる。このキャッサバは、タイにとってはトウモロコシと並んで外貨を稼げる有力農産物です。うどんに混ぜるだけではなくてインスタントラーメンなどいろんなものに入っています。イモは飼料用にも使われています。

そのような農作物であるため、タイ政府は東北部の森林地帯を、換金作物であるキャッサバやトウモロコシなどの農場にどんどん変えていきました。その結果何が起きたか。科学的に立証されたわけではありませんが、現地の人が言うには、慢性的な旱魃に見舞われているといいます。タイの東北部では50年代、森は東北部の6割にあたる1000万ヘクタールを占めていましたが、それが今、170万ヘクタールに減ってしまったといいます。

農民たちはどうなったか。記事（p. 25）の写真は、その代表が訴えているところです。「農家はみんな借金まみれだ、救済せよ」ということをいっています。キャッサバやトウモロコシを、機械化してどんどん作っていこうとしたのですが、次第に連作障害が出たりして、あるいは生産過剰で値崩れなどして、やっていけなくなった。そこで増えているのが海外への出稼ぎだったということです。グローバル化がどんどん進んでいく中で、タイでも家庭的な農業が廃れて、単一作物を作るようなやり方への切り替えが進行した結果、農民を貧しくしたんだと、農民運動の指導者が言っています。

アジア的な農業は将来どうすればよいのか、それを考える上で本質的な問いかけのようにも思います。

② グローバル化の渦

農業のグローバリゼーションが何をもたらしたか。もっとも端的に出ているのはタイの酪農です。タイは南国ですから平地は暑いんです。あまり暑いところでは牛乳を搾ることはできません。冷涼な高原

（1）　17版　第40595号　（明治25年5月4日第三種郵便物認可）

ムラは問う　第6部　食　アジア発　②

乱伐の果て　消えゆく森　迫る干ばつ

「畑で借金苦」　憤るタイ農民

「きのう、この辺りで水牛が五頭も熱波で死んだんだって」。タイ東北部のカラシン県で、キャッサバのでんぷん工場を取材した翌日。ラジオのニュースを、タイ人の通訳が教えてくれた。

先進国の需要

三月なのに連日四〇度近い異常気象。「イサーン」と呼ばれるタイ東北部は、慢性的に干ばつに脅かされている。「森を切りすぎたせいだ」。農民たちは肌身に感じている。乱伐は、日本など先進国の食料需要に応じた結果でもある。

中国地方の約五倍の広さで、なだらかな台地状のイサーン。かつては、うっそうとした森に覆われていた。建築材になるチークをはじめ、バナナやヤシも自生する熱帯林。「仏の森」と尊び、森に石仏を建てる地域もある。

「キノコや果実、薬草、小動物もあふれている。食うに困らんかったよ」。一九七〇年代の六年間、反政府ゲリラとして森で暮らしたカンチャイ・ホンカーミーさん(51)は懐かしむ。

森は五〇年代、イサーンの六割にあたる一千万㌶を占めていた。それが今、一割の約百七十万㌶に。「昔ながらの焼き畑と違い、自然の限度を超えた伐採だったんだ」とホンカーミーさん。

最初は、木材を輸出するため森を切った。伐採地は、トウモロコシやキャッサバなど先進国向けの換金作物の畑にした。紙原料のユーカリの木も植えた。いずれも作業効率を重視した単作。日本の食卓と関係が深いキャッサバ畑の面積は現在、百十万㌶に。半世紀で数十倍に増えた。

「森が消え、冷たい風が吹かなくなったよ」。コンケン県の小さな農村で暮らすチュアム・カサームさん(53)は表情を曇らせる。森林消滅でイサーンの大地の乾燥化が進んだ。八〇年代から干ばつが多発し始めた。

年間降水量は一〇〇〇㍉程度と日本の半分余り。岩塩が混じる地下水は使えない。干ばつは、天水が頼りのコメの収量減にもつながる。カサームさんの村は今、「百年の森構想」という手弁当の植林活動を進めている。

「命の森」と引き換えにした換金作物で、農民は豊かになったのかー。

「いや、暮らしは厳しくなる一方だ」。農民指導者のバムルーン・カヨタさん(55)は首を振る。「換金作物は最初は収益がいい。だが、借金して大規模化や機械化を進めると、連作障害が出てくる。生産過剰による価格暴落もある。結局、首が回らなくなるんだ」

広がる出稼ぎ

自宅を構えるカラシン県の村に八十世帯、四百人が暮らす。農家の借金は平均十万バーツ（約三十五万円）と、ここ十年で五倍に膨らんだ。借金のかたに農地を奪われた人もいる。二十年前に出稼ぎは皆無だったが、今では約百人が台湾やシンガポールで働く。タイでもムラは縮小している。

通りの両側を埋めて座り込む農民たち。国に対し、リーダーが借金苦の救済を訴える　（バンコク）

イサーンでの取材を終えバンコクへ。ここでも怒れる農民に出会った。農業・協同組合省前で、延べ七万人が借金苦救済を求め一週間の座り込みデモを続けていた。車の上からリーダーが叫ぶ。

「このままでは、おれたちは農業を捨てるぞ」

「世界の台所」と呼ばれる食料輸出大国。農民が田畑を投げ出せば、日本の私たちは大きなしっぺ返しを受ける。

クリック

タイの干ばつ　2004年は、イサーンを中心に30年ぶりの大被害。トウモロコシ生産量は前年比24%減、キャッサバも同21%減となった。今年もエルニーニョ現象の影響で、既に全国76県のうち58県、約1万8000㌶で農作物や家畜などへの被害が出ている。国王の肝いりで、政府は飛行機で雲に化学物質をまく人工降雨実験を進めている。

地帯でないと酪農ができません。40年余りかけてタイでは牛乳の自給率をようやく50％近くまで引き上げました。ところがオーストラリアとの自由貿易協定で状況は一変してしまいました。値段では太刀打ちできないと酪農家の廃業が相次いでいるということです。オーストラリア産の乳製品の関税は、段階的に引き下げられ、16年後には撤廃さ

れます。しかしそのときにはタイから酪農が消えているんじゃないかという見方もあります。

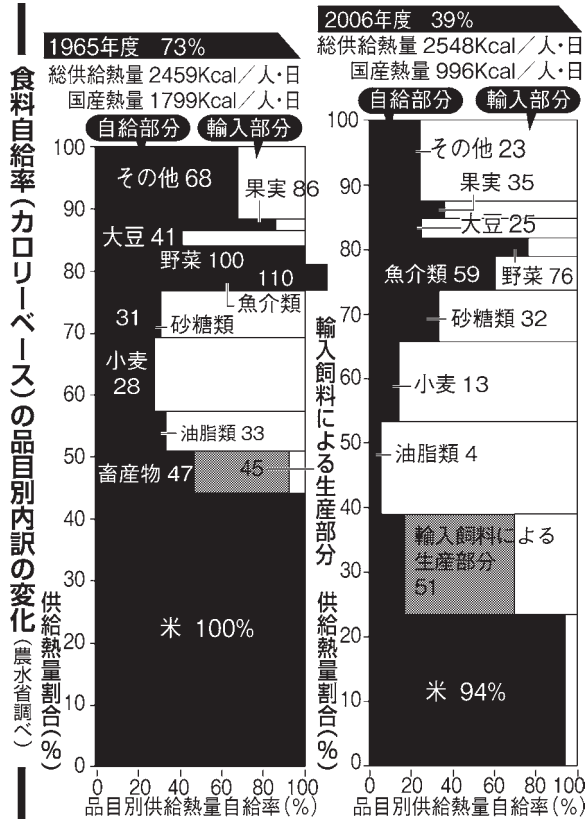
タイには、やはり自由貿易協定を結んだ中国からも安い農産物が大量に入っています。ニンニクやニンジンなどの作物を作る農家は大打撃を受け、離農が相次いでいるといいます。離農した人はさっき言ったように、海外への出稼ぎ、あるいは首都のスラム街にあふれ出すという現状があるということです。農業、食料におけるグローバリゼーションというのが何をもたらすかというと、より安い外国の食料品が市場を席巻します。消費者は当座は安いものが買えるということで喜ぶかもしれませんが、その陰で農家は泣いています。離農が進んで農地も使われなくなるので、国内の自給率も下がります。その結果、世界のトータルの食料の生産量も減るわけです。増え続ける世界の人口、食の様式の変化によっても増え続ける穀類の消費量。世界中で有り余る食料が生産できるのならまだいいかもしれません。安いものが食べられて、それはそれでメリットがあるというふうに言えるかもわかりませんが、実際には食料危機が将来訪れる可能性があります。グローバル化で各国の国内で農業がつぶれるに至った時、安い食料を受け入れた消費者に今度は飢えが忍び寄る恐れがある。そんな構図が描けるのではないかと私は思います。

3　食と農の結い直し

①　食の危機

それでは我々がこれからどうすればいいのでしょうか。この資料は、食料自給率の中身が40年間でどう変わったのかという農水省のグラフ（p. 27）ですが、わかりやすく比較してあります。自給率が73％だった1965年度と、39％まで減ってしまった2006年度のデータを比べてみましょう。

自給率がこの40年間に下がった要因は三点あります。その一は米を



あんまり食べなくなったこと。昔は約43%のカロリーを米から得ていましたが、それがグラフでは23%、もう主食の座が危ういような状況です。

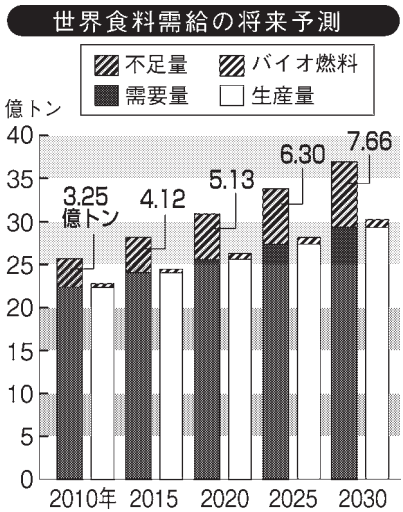
その二として、肉や脂を多く食べるようになってきたことです。グラフの畜産物のところで、輸入飼料による生産部分が目立ちます。豚や牛や鶏を育てるときに、輸入飼料で育てますから、結局カロリーベースでいうと輸入ものになるわけです。国産の豚肉、国産の鶏肉であっても、飼料は輸入に頼っていては自給率は上がりません。それと、

油脂類の原料も海外の大豆などが大半ですから、自給率が下がってきます。

要因その三。小麦、大豆、野菜類の輸入の比率が増えたことですね。小麦も昔は28％自給していましたが、今は13％になっています。大豆も昔は41％でしたが、グラフでは25％になっています。国産の麦、大豆については生産をできるだけ抑制する「安楽死政策」と呼ばれていますが、これをずっと政府が続けてきたことに原因があります。

実はこのことについても、去年、私もいろいろ連載で、この抑制策を改めるのがとりあえずの課題ではないかということを指摘しましたが、来年度から政府はやっと政策を転換するようです。これまでは過去作っていた実績がないと、補助金が大幅に減っていたんですが、過去の実績がない、いわゆる新たに麦や大豆を作る場合にも補助金を出そうという方向に転換を図るようです。やはりこの間の食と農をめぐる世界情勢の変化というのを、反映せざるをえなかったということだろうと思います。

自給率は目に見えません。日々の暮らしの中で自給率40％というのは、実感が持ちにくいのではないかなと思います。広島の大学生５人を対象に自給率調査というのをやってもらいました。２日間ほど自分たちが何を食べたのかを全部メモしてもらって、その自給率を農水省の自給率換算表に当てはめて換算していくというやり方です。５人のうち４人は自分の自給率はカロリーベースで80％はいくだろうと予測していましたが、実際調べてみると、換算自給率は４人とも40％から50％台でした。なぜこのようなことが起きるかというと、和食を食べても、自給率は下がるということがあるからです。さっきの農水省換算表で行きますと、自給率は納豆が13％、豆腐が31％です。あるいは国産の豚肉であっても５％とかですね。飼料がほとんど海外のものですから。しかも輸入の豚肉も結構入っている。卵にしても９％。ほとんど飼料が海外からの輸入だからですね。スーパーなどで買い物する



ときに、国産のものを選ぶようにしていても、実は自給率は高くならないという理由がここにあります。今、政府は自給率50％に増やそうとしていますが、食品表示の問題も大事でして、みんなが本当の意味で自給率の中身に向き合ってどうすればいいのか考えていく。それをできやすくするように表示を改めていかなければならないなと思います。

別の自給率のデータがあります。飼料用を含めた穀類の自給率はわが国ではいま27％でして、先ほどの総合的な自給率40％よりさらに低いのです。実は、食料需給の予測などをする際には、こちらの穀類のデータを使います。そこで、2030年までの世界の食料需給予測を石川県立大学の辻井博先生にお願いしました。大変複雑な計算になりますけれど、要は穀物の需要が今後どう伸びていくかという見込みと、生産の伸び方の見込みの予測です。辻井先生は生産は年に1.4％伸びると見込んでいます。それに対して需要のほうは1.8％伸びると見込んでいます。それをグラフ化したのがこれ（p. 29）です。需要の伸びの

理由として、世界人口は年間８千万人ずつ増えており、2030年にはいまの67億人が82億人になるという予測があります。もうひとつは中国、インドのように経済発展で肉類の消費が増えると、３倍から７倍という穀類が必要といわれていますので、さらに穀類の消費が伸びるだろうと。一時の勢いに陰りは見えますが、トウモロコシなどのバイオ燃料への転用もまだ増えると見込まれます。

一方で生産力の方ですが、農地は過去40年間で３％しか増えていません。しかし単位面積あたりの収穫量はこの40年間で2.3倍に増えました。緑の革命と呼ばれるような品種改良によって、植物が育つ過程で葉っぱや根やいろいろなところにいくものを極力実のほうに振り向けるという品種改良が浸透したおかげです。肥料によって収量を増やしたという面もありますが、ほぼ限界だといわれております。

今後増える見込みがあるとすれば、遺伝子組み換え食物、GM を導入すればまだ増えるのではないかという意見もあります。ただ、いろいろ抵抗感がまだまだあります。種を次の世代では育てられないので、常に種を買わなければいけないが、それを、アメリカをはじめとする大企業が握っているという問題点があるということも指摘されています。

もうひとつの不確定要因としては、地球温暖化が食料生産にどんな影響を及ぼすかということです。気温が１度２度あがれば、海や陸から蒸散する水蒸気が増えてきます。常識的にいえることは日本のように海に囲まれた地域であれば、沿岸部はゲリラ的な集中豪雨が増えるだろうといわれております。海からどんどん蒸発した水分が降ってくるということです。逆に内陸部では、地表の水分が蒸発する量が増えてきます。ですから旱魃が増えるだろうと思います。シベリアの凍土地帯みたいなところは、将来的に農地として活用できるかもわかりませんが、グローバルに考えると温暖化の影響はマイナス面が強いのではないかと思います。一昨年まで２年続きの大旱魃だったオーストラリアが終わったら南米、それでいまは中国で大旱魃だという話が出て

おり、その影響が非常に心配されるところです。日本は雨がたくさん降ってくれるので、それを集めて溜池にして使っていますが、海外では地下水をくみ上げての灌漑農業が非常に多いわけです。これがいつまで続くのか。石油と同じで地下水資源は有限ですので、先ほどのその温暖化の影響と一緒に考えれば、土地よりも水の制約のほうが大きくなるのではないでしょうか。

世界の食料需給の将来予測のグラフにもう一度返りますが、辻井先生の試算によれば、2025年には世界で6.3億トンの穀類が不足するという予測になっています。2030年には7.6億トンに広がるという予測です。10年後20年後の予測は占いの世界であるとおっしゃる方もいます。ただ、決して楽観視はできないのではないかと思います。さっきも言ったように気候変動等によるリスクが重なった場合は、世界的な食料難を招く可能性があると思います。今でも世界で約９億人が飢えに苦しんでいる実態があり、何らかの手を打つべきだと思います。

②　農山村と都市を結ぶ

食料危機の時代になれば、ほっといても農業など一次産業に光が当たるようになるでしょう。でも、問題は、その時代まで、どうつないでいくかです。特に危ういのが、担い手の高齢化が進む中山間地域です。昭和一桁世代が退場するなかで、だれが農地を受け継いでいけばいいのでしょう。

現実問題として、一番スムーズに行くのがUターンでしょう。農地があり、地縁がある、農機具も残っている。いま、大量退職時代を迎え、向こう10年やそこらは託せる。よし定年だ、待ってましたという人も多いでしょう。でもね、大抵、奥さんが付いてきません。だから中国地方から関東に出てきている人のようなケースでは、単身でUターンする覚悟がいります。これに対し、今ちょっとしたトレンドになっているのが、妻の実家に農的な世界にあこがれる夫が一緒にUターンするケースです。これはうまくいくんですよね。農作業が何もかも

新鮮で、ホームページで農村暮らしを発信している人も何人か知っています。「マスオさん帰農」と私たちは呼んでいます。

まあ同じ広島県内ならUターンといっても、広島市内から１時間かせいぜい２時間以内で帰れるから、二カ所居住がずいぶん増えています。

ただ、出身者だけではとても担えないほど耕作放棄地や遊休農地が増えています。だから出身者以外がＩターンで就農するかたちを作っていかなければ展望は開けない。それも、若手が専業でできるようなスタイルに持って行くのが理想的でしょう。いま、若い人の農業志向は、私たちの世代では考えられないほど高まっています。環境有限の時代を迎えていることも関係しているのでしょうか。でも、就農となるとなかなか進まない。なぜか。耕し手を待つ農地と、農業をしてみたいという人を結びつけ、農業の研修から農地や家の確保、地域に溶け込ませるようなアドバイスもできるようなリンク役がいないからです。だれでもいいから、作ってくれる人はおらんか、そんな声も農山村でよく聞きましたが、それは表向きのこと。だれでもではなく、やはり信頼できる人に託したいのが本音です。だから自治体や農協がそのリンク役を果たし、就農する人の人物も保証するような仕組みを、合併する前の町村単位ぐらいで作る必要があります。もちろん、ムラの側も、農地を使ってくれる人が後継者といった意識に変わっていかないとうまく行かないでしょう。

ただ、それでも若者の就農はなかなか難しいのが現状です。家族を養っていくだけの収入を得るには、農作物の価格がまだまだ低いからです。日本の農業は過保護だという主張があります。確かに米については700％をこす関税を張っていますが、これまで自由化を進めたから自給率が40％にまで下がっているとも言えます。海外から安い食料が大量に入ってきた結果、農産物の価格は下がり、命の源である食料をつくっても食えない、という状況にあります。日本の高いコメといわれますが、米価は15年前から３割以上も下がっています。ご飯一杯

の値段は約30円。１年余り前からの食料高騰でコメ回帰が進んだとの見方もありますが、菓子パンなどよりよほど安いんですよね。

政府は自給率50％を目標に掲げています。同時に農業に競争力を求めています。でも富裕層向けの一部の産品は別にして、規模がまるで違う農業大国の作物に価格面で対抗できるはずはありません。自給率を上げるためには、一定の所得保証が欠かせないと思います。東大農学部の鈴木宣弘先生によれば、農家所得に占める政府支払いは、わが国では１、２割、欧州は７、８割が環境や景観を理由にした直接支払いで、米国でも４、５割が国の補助だと言います。その結果、農業生産が減り、自給率が落ちたとも言えるでしょうから、自給率を上げるためには逆のことをすればいいのです。国民や消費者が農産物を買い支える仕組みを作り上げれば、ムラは守られて、食料も増産できるのではないでしょうか。

③　なぜムラを守るか

では、なぜムラを守らなくてはならないか。私たちの連載は、結局、それに対する答えを導くためだったようにも思います。大きく言って二つでしょうか。

一つは、食料安全保障の観点です。目先の自給率の向上にとらわれず、農業大国から安定的に確保することを目指すべき、というのが経済界の主流の考え方です。いわば国際分業論です。マスコミ界でも、大手紙は基本的にこの論調です。ただ世界不況以降は多少影を潜めています。100年に１度ともいわれる今回の経済危機をもたらした金融危機は、グローバル化した市場原理主義の行き着いた先ともみえます。根っこのところは、食料についても同じような気がします。さきほどもお話ししたように、食のグローバル化を進めると、安い外国の食料が市場を席巻するため、国内で耕作放棄が増えて自給率も下がる。その結果、各国を合わせた食料生産量は減ってしまう。未来永劫、農業大国で有り余る食料が生産できるならそれでもいいでしょう

が。いざ食料不足になれば輸出規制があっというまに広がることが、昨年の食料高騰のときの教訓です。

グローバル化万能論も、さすがに勢いをそがれています。多国間の自由貿易を進めようという世界貿易機関（WTO）の交渉が昨夏、中国やインドの反対でとんざしました。農産品の緊急輸入制限（セーフガード）をかけたい中国、インドなど新興・途上国が米国と対立したためです。中国は今、13億人もの国民を養うだけの農業生産をどう確保するか懸命になっています。実は、辻井先生の予測では、2030年時点で、世界の穀物不足量の約３割が中国での不足分となっています。だから、外国から安い農産物が入ってきて農業基盤が崩れることはどうしても避けたい。これは人口で中国を追い抜く勢いのインドも同じでしょう。WTO交渉も、農業分野では自給力を重視した流れにすべきとの意見も欧州とくにフランスあたりから出ており、その中で日本がどう発言力を確保していくかが問われています。それぞれの国が自分の国の食料のありかたについては独自の判断が貫ける「食料主権」を保障し、アフリカ、アジア諸国などへの農業基盤整備への支援を強化するような枠組みをつくるべきでしょう。

なぜムラを守らなくてはならないか。もう一つは、環境でしょう。土と水と日光などの資源を循環させながら、さまざまな恵みを与えてくれる農の営み。食料を供給するだけでなく、水を蓄え、小さな生き物たちをはぐくみ、いやされるような里山の景観。それらが私たちの周りから消えたとき、地に足の着いた人の育て方や生き方が出来るでしょうか。命の源である農の営みと食が切り離されるのでなく、その結い直しをどうすすめていくかが求められているのではないでしょうか。確かに今、追い風は吹いています。地産地消がひろがり、直売所も増えています。農村と都市、生産者と消費者の顔と暮らしが見える関係を、それぞれがそれぞれの立場で深め、広げていくことから始めるしかないでしょう。

中国新聞社は一昨年秋、農業に関することに取り組んでいる中国地

方の六つの大学のグループに集まってもらい、フォーラムを開いたことがあります。農家を支援するグループや、地元の農家から土地を借りて野菜をつくるようなサークルの代表たちが集まり、活動を報告し合いました。テーマは、縁農（農に縁ができる）と援農（農を支援する）。種をまいて育てて収穫する農の魅力を語る姿が印象的でした。そして「サポーターだけでなく、もっとプレーヤーになろう」と共に就農をと呼び掛ける若者もいました。こんな芽をみんなで育て、支えて行きたいものです。

参考文献

『中国山地（上）』中国新聞社編、未来社、1967年。
『中国山地（下）』同上、1968年。
『新中国山地』中国新聞社編、未来社、1986年。
『中国山地　明日へのシナリオ』中国新聞社編、未来社、2004年。
『ムラは問う―激動するアジアの食と農』中国新聞「ムラは問う」取材班、農山漁村文化協会、2007年。

（編者注：本稿は、平成21年２月21日に開催された、モラロジー研究所道徳科学研究センター主催「公開講演会」の内容を収録したものである。）